

皆さま、こんにちは。
府中教会、アンドレアです。

私たちは待降節というこの素晴らしい季節の準備を、イエスの誕生からではなく、主の再臨を待ち望むことから始めたいと思います。

本日の典礼で朗読される聖書は、いずれも、きたるべき救い主との出会いを、目をさまして待つようにすすめるものです。しかし、なにに目覚めていなさい というのでしょうか。また、「その日」「その時」という表現は、聖書によくでてきます。これは「救いの時」のことです。天の御父がわたしたちに救いの手をさしのべてこられる時です。「その時」人びとの涙はぬぐわれ、苦しみは去り、罪の汚れは清められ、新しい生命の輝きにつつまれる時です。神は自分たちを見捨てられない、どんなに汚れても、どんなにひどいことをしても、神との関係は絶対に切れないという「確かさ」を神の中にみたのです。つまり、神が父であるということに、切っても切れない、神とのつながりの「確かさ」をみたのです。そこからまた、希望をくみとってきたのです。

目をさましていうこと、それは、神が父であるという信仰を生きるようにとの促しに気づくことです。どんなにひどい苦しみがおとずれ、絶望の中に落とされようが、やみの中に父としての神の愛の「確かさ」をみつめ、そこから希望をくみとり、未来に向かって明るく生きるようにという招きが、目をさましていなさいという呼びかけの中にあると感じます。

